

ゼア・ウィル・ビー・ブラッド

2008(平成20)年3月7日鑑賞(東宝試写室)

★★★★★



監督・脚本＝ポール・トーマス・アンダーソン／原作＝アプトン・シンクレア『石油！』／
出演＝ダニエル・デイ＝ルイス／ポール・ダノ／ディロン・フレイジャー／キアラン・ハイ
ンズ／ケヴィン・J・オコナー（ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャ
ーズ ジャパン 配給／2007年アメリカ映画／158分）

……実在の石油王をモデルとした、人間の欲と裏切りそして狂気のサマを描く一大叙事詩は迫力満点！ おどろおどろしい(?) タイトルの意味も十分実感できるはず！ アカデミー賞主演男優賞の受賞は当然と納得できる、鬼気迫るダニエル・デイ＝ルイスの演技は、まさに神ワザ！ それにしても、第80回アカデミー賞のノミネート作品は、すべて地味、暗い、でもすばらしい！

第3章

十人十色の生き方を描く



やはり主演男優賞はダニエル・デイ＝ルイスが！

『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』は第80回アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演男優賞、脚色賞など最多8部門にノミネートされたが、結果的には同じく8部門にノミネートされていた『ノーカントリー』（07年）が監督賞、作品賞、助演男優賞など最多4部門を受賞し、本作は主演男優賞と撮影賞の2つにとどまった。今年のアカデミー賞は、殺人の『ノーカントリー』、裏切りの『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』、腐敗の『フィクサー』（07年）など全体に暗く陰湿で、「ダーク・オスカー」の異名をとったほど。私はそれを「地味！ 暗い！ でも、すばらしい！」と表現した。

そんな中、助演男優賞は『ノーカントリー』で最も凶暴な殺し屋を演じたハビエル・バルデムが受賞し、主演男優賞は本作で最もダークな主人公になりきったダニエル・デイ＝ルイスが受賞したが、ある意味それは当然……？



「石油発掘史」とは……？

ブーチン大統領の後を継ぎ、第1副首相だったメドベージェフ氏がロシアの第3代

大統領に就任することになったが、プーチン氏が「強いロシア」を実現することができたのは、豊富な石油・天然ガスをバックとした強気な外交政策によるもの。

ガソリン代の高騰が続き、1リットル150円前後と私が車に乗っていた時代に比べると1.5倍になっているが、日本はもともと資源のない国。それに対して、1492年にコロンブスが発見した新大陸アメリカは資源豊富な大国だから、西部開拓史というアメリカ特有の面白い歴史と共に「石油発掘史」ともいうべき、一獲千金を夢見る冒険者たちの歴史があったのは当然。古いテキサスを代表する大牧場が、石油文明に象徴される新しいテキサスに転換していく1920年代のアメリカを描いた名作が、故ジェームズ・ディーンの『ジャイアンツ』（56年）。20世紀初頭に始まる石油への夢が、多くのアメリカ人をその発掘に向かわせたのは当然だが……。

原作は……？

プレスシートによると、この映画は19世紀後半カリフォルニアで起きた「ゴールドラッシュ」ならぬ「ブラック・ゴールドラッシュ」の中、現実に生まれた石油王エドワード・ドヒニーをモデルとした、アプトン・シンクレアの『石油！』を原作としたもの。エドワード・ドヒニーが現在のドジャース・スタジアム付近で石油を掘り当て、巨万の富を築いたのは1892年とのこと。また、カリフォルニアにおける石油ブームは、石油が枯渇するわずか10年程度しか続かなかったとのこと。

しかし19世紀末、石油を掘り当てるため1人つるはしを振るうダニエル・ブレインビュー（ダニエル・デイ＝ルイス）のシーンから始まるこの映画は、それだけで迫力十分。あらためて、欲が人間を成長させ、欲が国をつくるという当たり前の現実を実感させられることに……。

ダニエルのキャラとその生きざまは……？

幼い一人息子 H. W.（ディロン・フレイジャー）を連れながら、パートナーのフレッチャー（キアラン・ハインズ）らと共に石油発掘の旅を続けているダニエルが強烈な個性をもった人物だったのは当然。またそんな人物を、『ギャング・オブ・ニューヨーク』（01年）でもアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた演技派ダニエル・デイ＝ルイスが演じたのだから、興味深いキャラ、というよりどす黒く狂気じみたキャラに仕上がったのは当然……？ ダニエルのキャラの特徴は、第1に孤独、第

2に疑い深く他人を信用しない、第3に欲が深いというところ……？ 今少しずつ石油を掘り当てているダニエルの長期戦略は、大量の石油を発掘して大成功し、大金持ちになり、その後は一人息子 H. W. に跡を継がせようということ。しかし、こういうタイプの創業者はたとえ大成功しても、いろいろと問題を起こすもの……？

また、この手のキャラには当然敵がたくさん生まれるから、敵との戦いが大変。そして最後には、考えられないような不幸が待っているというのが相場（？）だが、おどろおどろしいタイトルを見ても、そんな予感が当たりそう……？

宿命のライバルは……？

ダニエルの宿命のライバルになるのは、聖霊派教会のリーダーとして頭角を現す若きカリスマ牧師イーライ・サンデー（ポール・ダノ）。彼が住んでいるのはアメリカ西部の小さな町リトル・ボストンだ。ここは土壌の質が悪いため作物が育ちにくく、一面荒野のよう。そんな土地に石油が出るという情報を売りにきた青年と、ダニエルとの駆け引きがこの映画序盤の見どころだが、さてその青年は一体ダレ……？

イーライはダニエルが石油試掘のために土地を買い占めに来ていることをよくわかっている。そこで、かなりきわどい駆け引きを続け、結局イーライが教会を建てる時には、5000ドルの寄付をさせることを確約させたからまずまずの条件。だって、石油発掘の可能性がなければ、こんな荒地は二束三文だから。

このイーライを演ずるのは、『リトル・ミス・サンシャイン』（06年）（『シネマルーム12』414頁参照）、『キング 王の罪』（05年）（『シネマルーム13』378頁参照）で印象的な演技を見せていたポール・ダノだが、この映画でも宗教的野心と狂気心をもった若者イーライを見事に演じている。つまり、ダニエルもダークなら、イーライもかなりダークということだ。

終盤近くになると、ダニエルの息子 H. W. とイーライの妹が結婚することになるから、ダニエルとイーライは親戚になるわけだが、そんなことで互いの対立が解消するほど現実には甘くない。ダニエルの晩年、ダニエルの屋敷内にあるボーリング場で展開されるクライマックスシーンを含め、この2人のライバル模様をしっかりと！

もう1つのライバルは……？

一匹狼のダニエルは石油を掘り当てて大成功したわけだが、それはいわば独立系の

1つの企業が生まれただけの話。アメリカは広いから、この時期すでに大手メジャー石油会社が成立していたとしても不思議ではなく、その1つがスタンダード・オイル社。そんな大会社から見ると、ダニエルが買収対象者と映ったのは当然。そこで展開されるのが、掘り当てた石油の権利をいくらで手放すかという条件交渉だが、ここでダニエルが切ったタンカ（？）がすごい。プーチン大統領の任を継いで第1副首相から第3代大統領の就任することが決まったメドベージェフ氏が会長をつとめているロシア政府系天然ガス独占企業ガスプロムは3月4日、ウクライナへの天然ガス供給をさらに25%削減し、削減幅が50%となったことが報道された。これは未払いガス代金回収のための措置だが、このように強権的に実行行使をしていく手法は、いかにも強権的かつヤクザ的……？そして、こんなことができるのは、パイプラインによる天然ガスの供給をガスプロムが独占しているため。そう考えると、ダニエルだって自力でアメリカ西海岸まで石油を運ぶパイプラインを敷き、直接外国と取引することができれば、価格も供給量も思いのままということだ。また、そうすれば高い列車による輸送料を払わなくて済むからメリットはきわめて大。今から100年近く前、ダニエルがそういう発想をしたのだから、そりゃ何ともすごいもの。



成功すると弟が……

34年間も弁護士稼業をしていると、遺産相続をめぐる争いに突然認知された子供が登場したり、かつてこんな関係だったと名乗る人間が登場してくることがある。それはもちろん遺産が大きい場合の話で、小さい場合はそういう争いが起きないから、人間って不思議……？この映画が2時間38分と長くなったのは、中盤から突然ダニエルの弟と名乗るヘンリー（ケヴィン・J・オコナー）が登場してくるため。顔はたしかに似ている（？）が、もともと疑り深いダニエルだからそう単純にその話を信用するはずはない。しかし、兄と違ってボソボソと語る気の弱そうなヘンリーは、「失敗続きの人生だから、今さら何も望むものはない」と妙に低姿勢だから、徐々にダニエルもヘンリーを重宝しはじめたよう。ちなみに昔日本では、平家討伐の兵を挙げ、ある程度成功した源頼朝のもとに、突然弟の九郎義経が登場してきた。すると、しばらくは2人の間に良い関係が続いても、次第に頼朝の側近たちと義経の仲が悪くなっていったのは、日本人なら誰でも知っていること。それはアメリカでも同じで、成功したとたんにヘンリーが登場し要職に就き始めると、それまでのパートナーであったフ

レッチャーとの関係が悪くなるのでは……？ ダニエルが重要な仕事にヘンリーを同行させた時、私は一瞬そう思った。ところが、私よりダニエルの方が考えが深かったよう……？ 西海岸に到着し、海でタップリと遊んだダニエルとヘンリーの間でその後展開されるアツと驚くストーリーにビックリ！

父と息子の離別と対立は……？

この映画を観ていると、19世紀末から20世紀初頭にかけて始まった石油採掘工事が、つるはし1本の手掘り工法(?)から急速な進歩を遂げていることがよくわかる。

ウー・ティエンミン 呉天明監督がチャン・イーモウ 張藝謀を主演に起用した中国映画『古井戸』(87年)は、水のない山西省太行山脈の奥にある老井ラオジンと呼ばれる小さな村における井戸掘りの執念を描いた名作(『シネマルーム5』79頁参照)。井戸掘りは生きるために欠くべからざるものであるのに対し、石油採掘はもうけるためと目的は全然違うが、ダニエルの姿をみるとその執念は全く同じ。また、井戸掘りと石油採掘に共通するのは、危険を伴う作業であること。

この映画でもある日突然、ガスが噴き上げてきたからビックリ。これは石油が噴き出す前兆(?)だが、発火したら大変なことに。こんなシーンをどのようにして撮影したのか私には想像もつかないが、この事故(?)によって、H. W. は耳が聞こえなくなり、しゃべることができなくなるという不幸を背負い込むことに。そのため以降、「神は無力か!」とイーライを激しく責めるダニエルとイーライとの間の対立が拡大すると共に、ダニエルとH. W. との関係も少しずつ歯車が狂い始めることに。その結果、H. W. による放火事件と父子の離別という不幸な出来事が起きるが、その姿は悲惨なもの。さらに、それから20数年後の父と息子の対決シーンは実に異様。

石油王となったダニエルの富と名声のウラに、ここまで破滅してしまったダニエルの魂の姿を見せつけられると、誰でも思わずぞっとするのは……？

人物が異様なら、音楽も……

この映画は暗い洞穴の中で、1人つるはしを振るうダニエルの姿を映し出す冒頭のシーンがすばらしいが、それをさらに実感させるのはバックに流れる音楽。ラストの字幕表示中に流される音楽は美しいバイオリン協奏曲だが、物語進行中に流れる音楽はウォーンとうなりをあげるような音を中心とした、いかにも不安定で奇妙、したが

って、全然美しくない音楽……？

こんな暗い異様な音楽をつくり出したのは、ジョニー・グリーンウッドというギタリストとのこと。もちろん、私は彼を全然知らないが、この映画のこの音楽に興味をもたれた方は、是非詳しく調べてみては……。

2008(平成20)年
3月11日記

不気味なタイトルにふさわしく、不気味な石油王ダニエル(D)を演じた名優ダニエル・デイルイスがアカデミー賞主演男優賞を受賞！二時間三十八分の長丁場を、彼の圧倒的な存在感でタツプリと！

一獲千金を夢見てつるはしを振るう山師Dが成功した原動力は、底知れぬ欲望の継続と手段を選ばない冷酷さ。そんなDだから、情報提供者としてDに油田をもたらし、今は聖霊派教会の指導者となった若者ポール

(P)との離反は当然。しかし、後継者と期待した息子が油田爆発事故のため霊睡者になったのは想定外。金しか信じていない

Dが「神は無力か！」とPに迫るのは、都合主義だが、以降Dの欲望はさらに狂信的に。すごいのは、西海岸まで

で通じるパイプライン敷設計画の実行。そこで起きる土地買収交渉をめぐるDとPの駆け引きと壮絶な闘いはこの映画のハ

イトだ。「契約は守るべきもの」は英米法の設計画の裏面。そこで起きる土地買収交渉をめぐるDとPの駆け引きと壮絶な闘いはこの映画のハ

不気味だが圧倒的な存在感

七年の小説『石油！』が原作だが、この映画が示唆するそんな米露中の石油、天然ガスをめぐる現状に対する貴重な警鐘をしっかりと感じたい。



ゼア・ウィル・ビー・ブラッド

成功したDのもとに突然登場した弟(?)にはビックリ。ピッタリタイトルだと納得させられるその後のおどろおどろしい展開は、Dが狂気を帯びた怪物に成り果てたことを明瞭に。

Dが石油界に君臨したのは二十世紀だが、その後米国には第一、第三のDが次々と？ また、石油や天然ガスに伴う巨大利権をめくっては、今やロシアも中国もあの手この手を行使中？ 一九二

大阪日日新聞 2008(平成20)年5月3日